

親日国となったインドネシア・ジャカルタに見る“JEPANG”の歩み —「ハード・パワー」から「ソフト・パワー」へ—

早稲田大学政治経済学部政治学科

1A131299-1 水沼里衣

概要

昨今、急速に成長し、インフラ整備で慌ただしくなったインドネシアの首都、ジャカルタでは、街中の道を日本車が埋め尽くしている。タクシーの運転手に「Jepang（日本）」と答えると、笑顔で返してくれるこの国は、日本に対し良い印象を持っていると答える人が8割を超え、最も日本に友好的な国の1つとなった。

だが、これまでの両国の関係を振り返ると、そこには明るい歴史よりも、第二次世界大戦時の日本軍によるインドネシア占領という暗い過去が見えてくる。そのインドネシアで日本はどのように“JEPANG”のイメージを変えてきたのか。現在家族がジャカルタに住む私はこの疑問を抱き、本ルポルタージュの作成にあたった。

本ルポではまずこれまでの日伊間の歴史を振り返り、19世紀後半の両国の関係の推移を考察する。その過程のなかで見えてくる「ハード・パワーからソフト・パワー」へのシフトを1つの時代の流れの変化と捉え、次にこのソフト・パワーへの注目の高まりにより、日本がいかにして国家ブランド戦略を展開してきたのか理解を深める。最後に、今日の戦略の成功例として取り上げられることも多いインドネシアを舞台に、現地でインタビューを行い、その実状・課題・展望について意見を伺った。

今日の“JEPANG”が築かれてきた道のりには「先進国日本」のイメージ発信、およびソフト・パワーを重視する国策へのシフトがあった。ただ今後の関係を見ると、国家戦略ともなった「クールジャパン戦略」の効果は十分とは言えず、“JEPANG”も他国に埋もれ始めつつある。21世紀、求められるのは「発信」だけでなく「ダンスパートナー」としての相手国の認識、受入態勢の充実そして現地との新たなコラボレーションだ。2016年のリオオリンピック閉会式、安倍首相はドラえもんの出した配管からマリオの格好をして登場し、バトンを受け取った。世界からの注目が高まる今、インドネシアを舞台に日本の文化外交の歩みを振り返る。